
Grandpa

イリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G r a n d p a

【Nコード】

N 9 9 6 5 E

【作者名】

イリ

【あらすじ】

覗き込んだ顔は、あのおじいちゃん？腕には点滴、体にはモニター。一週間前に会ったあのおじいちゃんとは変わり果てた姿だった。

覗き込んでみれば、それは確かにおじいちゃんの顔だった。

それは突然の事だった。お母さんからの電話に慌てながらも、車で一時間半と掛かる病院へと駆けつけた。受付へと走っている最中に色々な事が頭をよぎり、もう気が気じゃなかった。院内を歩く老人の後姿を見るたびに、おじいちゃんの顔を浮かび色んな思いが溢れかえる。

だって、そうだ。この前まで元気だったんだから。

そう思ってしまうのも無理がない。ほんの一週間前にはじいちゃんの家へと行き、一緒に昼食を食べたのだから。おじいちゃんのシワシワの手の甲に、自分の少し肉の付いた手を重ね、耳の遠いおじいちゃんに顔を近づけ話もした。そんなおじいちゃんが倒れたなんて。

受付の前には既にお母さんが立っていて、私を探すようにキョロキョロと辺りを見渡していた。私と目が合つと、こっちこつちと手招きをする。

「おじいちゃんは？ どうだったの？」

息も整わず呼吸が苦しかったけれど、そんなことどうでもよかった。おじいちゃんの容態の方が大切だった。一秒でも早く会いたい。おじいちゃんの元へと行きたい。

「胃にね、癌があるみたいなの」

不安が込み上げそれを聞くのがやっとだった。病室へと向かう廊下の途中で母がゆつくりと口を開く。おじいちゃんはお母さんが駆けつけた時に、蹲りお腹の周りに何枚も湿布を貼っていたという。

「今日はもう遅いから、病院には行かないって言うのよ。迷惑がかかるからって。病院へ連れて行くまでに1時間も説得したの」

僅かだけれど、お母さんの声は震えていたと思う。真っ赤になっ
ているその目は先程までずっと泣いていたことを物語っている。
次の言葉を聞くのが恐かった。もう答えがわかつている気がして。

「……おじいちゃん。治るんでしょう？」

いくら癌とは言え、今はちゃんと治療をすれば完治する病気なの
だ。それにおじいちゃんは毎月病院へ通っていたのに、何故、今に
なって癌が発症しているのだろうか？ 静かな廊下にはパタパタと走
る音とひっそりと話す私達の声が時折響いていた。

エレベーターまであと少しの距離なのにとても遠くに感じる。歩
いても歩いて、距離が縮まらず気持ちばかりが焦ってしまう。お
母さんの答えはまだ返ってこないことが余計に気持ちを逸らせた。

「……もって半年だろうって」

「う、嘘！」

まさかと足を止めてしまうとそこは丁度エレベーターの前で、点
滴をぶら下げた患者さんがまだか、まだかとエレベーターの階数が
表示されている部分を見ていた。私はお母さんを正面から見直すと
もう一度同じ事を聞いた。

「治るんでしょう？」

お母さんは何も言わなかった。私と目を合わせることやせずにた
だゆっくりと首を横に振った。これまでにない絶望感が私を襲う。
足下はフラフラと揺れるように意識が遠のきそうだった。

「末期だって言われたの」

チン、と音を立てドアが開いたエレベーターへ、お母さんは私の
手を引いて乗った。一緒に同乗している患者さんは、私達の話や聞
いているのかいないのか、それとも空気の重さに耐えられなかった
のか目を合わせようとはしない。お母さんは三階のボタンを押すと、
私の背中を優しくさすり口を開いた。

「ねえ明海。じいちゃん明海が来る事は知っているけど、自分の病
気の事は何も知らないから。いつも通り上手く笑ってくれるかなあ
？」

おじいちゃんには告知をしないことに決めたらしい。持病以外にどこも悪いと思っていないじいちゃんにこれ以上、不安を募らせるような事をしたくないと、お母さんは言った。

「……わかった。どうゆうことになってるの？」

「胃潰瘍って事になってる」

今、この瞬間にも泣き出しそうだと言うのに。おじいちゃんを見て私は笑えるんだろうか？ この前と同じようにじいちゃんと手を重ね合えても、私は一人違う事を考えてしまうのだ。何も知らないおじいちゃんに、私も何も知らない振りをしなくちゃならないんだ。三階へ着くとナースセンターの真向いの部屋におじいちゃんは居るとお母さんは言った。何かあった時にすぐに、医師や看護師が駆けつけれるようにする為だろう。

ぶあつと強い風が私の頬に当たる。非常階段の近くの窓が全開のせいだろう。まるでこの高ぶった感情を冷静にさせるかのようにも思えた。私はおじいちゃんの病室の前で足を止め、お母さんを見る。「おじいちゃんは、今起きてるの？」

「うつん。寝てるよ」

正直、少しだけほっとした。上手に笑える自信がないのだ。明海と名前を呼ばれでもしたら堪えている涙や、言葉、全てが溢れてしまいそうだから。

「明海。これで帰りにキャンディでも買って帰りなさい」

おじいちゃんの家へ行くと、帰宅時には必ずそう言っ、私に千円札を差し出す。お小遣いを貰う程の歳でもないのだ。

今時キャンディにそんなお金なんてかかるわけなのに。私お小遣いをくれるのであれば、晩御飯のお魚でも買えばいいのにと、申し訳なさそうに言っと

「じゃあジュースも一緒に買いなさい。お母さんの分もね」

下がり眉をさらに下げて、笑顔で言う。持病の事など関係なく、家の前まで出てきては、私達が角を曲がるまで見送って、家に着け

ば電話が入る。とても優しい人なのだ。自分よりも他の人を考えてくれる、そうゆう人なのだ。

寝ていると分かっていながらも、私は部屋を二度ほどノックして様子を伺うように、部屋の奥に置かれたベッドをそうつと覗いた。

「おじいちゃん。明海だよ」

真っ白な病室の中には、膝下くらいまでの高さしかない小さな冷蔵庫付の棚と、それに乗ったテレビ、そして衣類を収納できる細身のタンス。そしておじいちゃんが寝ているベッドと、隣には二つほど丸椅子が置かれているだけで、とても窮屈だった。

「おじいちゃん」

腕には点滴の針が刺さり、何種類もの点滴がぶら下がっていた。

顔には酸素マスクが付き、病院の寝巻を着せられたその体にはどれがどれの線だかわからないモニターと、下半身にはカテーテルを入れられ、変わり果てた姿だった。

「……っ」

私はまだ顔をちゃんと見れないでいた。想像を超えたその姿に先日までのおじいちゃんの姿など微塵もない。シュー、シューと聴こえる酸素の流れる音にも、ピツ、ピツと鳴るモニターの音にも耳を塞いでしまいたかった。

「耳元で言わないと聴こえないから」

お母さんは私の腕をトン、トンと叩きながら言う。そんなの分かっている。おじいちゃんとの話し方は私が一番良く知っている。あの距離で、あの温もりで今までずっと過ごしてきたんだ。

ベッドの手すりに腕をかけ、私はおじいちゃんに近づいた。

覗き込むと、それはおじいちゃんの顔なんかじゃなかった。

どこか痛いのか眉間に皺を寄せ、口角が下がり少し苦しそうだった。すやすやと眠っているとは到底思えず、痛みから逃れるために無理やり眠っているようだった。腕には、何度か失敗したのか絆創

膏が数枚貼られていた。

私の方が肉がついてたはずなのに、おじいちゃんのシワシワの手はむくんでいた。そつと手を乗せ耳元に顔を近づけ、いつものように少し大きい声で名前を呼ぶ。

「おじいちゃん、おじいちゃん。明海だよ」

うん、と声を出しこつちを向いたおじいちゃんを、私はどんな顔で見えていたかなんて分からない。もしかしたら、これでもないくらい不自然な笑顔だったかもしれない。おじいちゃんは私に気付くと、枕の下から何かを取り出した。

手に持っていたのは、いつも帰りに渡す千円札だった。私の手のひらにそれを乗せると、おじいちゃんは笑った。

「明海。遠いのになわざわざ来てくれてありがとうねえ。帰りにキャンディ買っていきなさい」

まさかの言葉に私は驚き、私は思わず顔を背け、おじいちゃんに背中を向けてしまった。我慢をしていたはずの涙がポロポロと溢れ止まらない。どうしてこんな状況で、おじいちゃん。その止まらない涙を何度も何度も拭い、私は振り向いて笑う。

「おじいちゃん。キャンディはそんなに高くないんだよ。でも、ありがとおね」

覗き込んでみれば、それは確かに私が見てきたおじいちゃんの顔だった。

おじいちゃんは、もう一度、笑った。あの優しい顔で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9965e/>

Grandpa

2010年10月8日15時43分発行